

医学生が国際保健をテーマに学習

難民の医療支援や国際交流と幅広く

獨協医科大学の医学生 10 人が 7 月 12 日、城西病院を訪れ、「国際保健」をテーマに公益財団法人「茨城国際親善厚生財団（IIFF）」の行っている国際医療支援活動について学びました。

この国際保健の講義は、毎年、同大学 4 年生の公衆衛生学実習の一環として行い、「母子保健」、「産業保健」、「精神保健」など 14 のテーマを設定している中から、「国際保健」をテーマとして、IIFF の国際医療支援や国際交流を学んでいます。国際協力支援センター国際交流支援室の千種雄一室長や大平修二教授とともに、34 年にわたって行っている国際医療支援の状況を学びました。

講師は、アフガン難民支援を皮切りにタイ北部のゴールデン・トライアングル地域で活動してきた介護老人保健施設「すばる」の荒川邦江副理事長とアフガニスタン医師で日本に帰化したアマデアル・亜来春さんの 2 人が講師となり、「IIFF」の国際医療支援活動やタイ、アフガニスタンの医療事情などについて講演しました。

「世界中で何が起きているのか、自分の目で見たかった」と語る荒川副理事長。アフガン難民支援で、城西病院に治療に訪れたアフガン難民の戦傷者の世話をするため、在日アフガニスタン医師に文化や風習などを学びながら身の回りのお手伝いをし、その後、看護師としてアフガン難民の医療救援活動、タイでの医療支援などの活動を行ってきました。

荒川副理事長は、こうした戦乱や内戦での混乱し



た状況を通し、衛生状況や医療体制が整わない中で医療支援の状況などを話し、タイで麻薬撲滅を進めるメーファールワン財団とのつながり、日本での活動や国際交流、文化交流と輪が広がっている状況を説明しました。

アフガニスタンのソ連軍侵攻が始まった時期に医大生となり、医師になった亜来春さん。戦乱の中で来日し、IIFF の職員となってアフガン難民の医療支援などの活動を行い、平成 26 年に日本国籍を取得しました。

亜来春さんは、戦乱の中で混乱するアフガニスタンの現状やアフガン難民の状況などを説明。引き続き、ソ連侵攻後のアフガニスタンの実情や医療状況などを詳しく解説。「アフガニスタンでは戦争のために精神を病んでいる人が大勢いる」と語り、学生たちも異文化や医療支援に対して意見交換をしていました。

平成 28 年 7 月 15 日



アマデアル・亜来春さん

荒川邦江副理事長

